

1 『椿姫』 (*La Dame aux camélias*, 1848)

フランスの小説家デュマ (子) の長編小説。1848 年発表。マリ・デュプレシスという作者の愛人をモデルにし、主人公の回想形式をとる。椿の花を愛して椿姫とあだ名される高級娼婦(しょうふ)マルグリット・ゴーチエは、青年弁護士アルマン・デュバルのひたむきな情熱に触れて愛に目覚める。歓楽の日々を捨て、彼女はアルマンと 2 人パリ郊外の別荘にこもって静かな幸福に浸るが、それも長くは続かなかった。アルマンの父が彼の留守に訪ねてきて、本当に愛情があるなら彼の将来のために別れてくれと懇願する。悲痛な想(おも)いで犠牲を受け入れた彼女は、彼を捨てたと思わせて去り、以前の困われ者の暮らしに戻る。激怒したアルマンは公衆の面前で彼女を侮辱して旅に出、彼女は絶望のあまり肺病を悪化させて死ぬ。

この救いのない結末は著者自身による劇化の際改められ、マルグリットは真相を知って駆けつけたアルマンの腕の中で死ぬことになる。初演 (1852) から驚異的成功を博し、ベルディによってオペラ化され、作者の名を不朽にした。サラ・ベルナールの舞台、衣装はミュシャ (Alfons Mucha, 1860-1939) のデザインによる。

2 失われた時を求めて (*À la recherche du temps perdu*)

フランスの作家マルセル・プルーストの長編小説。『スワン家のほうへ』(1913)、『花咲く乙女たちのかげに』(1918)、『ゲルマントのほう』(1920~21)、『ソドムとゴモラ』(1921~22)、『囚(とら)われの女』(1922)、『逃げ去る女』(1925)、『見出(みいだ)された時』(1927) の 7 編からなる。

小説は語り手の「私」が少年時代を過ごしたコンブレの村の回想から始まる。ここにはスワン家のほうとゲルマント家のほうへ延びる別々の散歩道があり、それぞれブルジョア社会と貴族社会を象徴している。小説は少年の「私」にはまったく相いれないと思われたこの二つの世界が「時間」の流れのなかで交差・融合してゆく姿を、世紀末から第一次世界大戦に至るフランスを背景に描き出す。

その手法は伝統的な筋の展開にはよらず、主要テーマが交響しあう、いわば音楽的構成によっていて、ここにまずプルーストの小説の独創の一つがある。コンブレでの生活、スワンの娘ジルベルトへの「私」の初恋、スワンとオデットの恋、海辺の避暑地バルベックでの「私」と花咲く乙女たちとの出会い。ついで大貴族ゲルマント一族を中心とするパリ社交界のバルザック的な風俗描写、同性愛者の臨床医的な記述、アルベルチーナに対する「私」の恋愛心理と嫉妬(しつと)の精緻(せいち)な分析が続き、最後に主要人物が変わり果てた老残の姿で登場してくるゲルマント大公妃邸での演奏会の場面で、小説はその巨大な回想の円環を閉じる。

一方、この小説は作家志望の「私」が自己の真実を求めてたどる内的遍歴の書でも

ある。「私」はついにその真実を発見できず、すべては失われたと思ったとき、それまでの人生で幾度か経験したことのある無意志的記憶によって過去が現在にあふれ出るのを体験し、深い歓(よろこ)びを味わう。「私」は奇跡的によみがえったこの超時間的な生命こそ自己の真実であると確信し、これを作品として再創造する決意を固める。したがってこの小説は「時間」を姿なき主人公としつつ、破壊者であるその時間を克服する人間精神の壮大なドラマでもあった。(保莉瑞穂)

3 ヴァントゥイユの音楽は小説構造の基軸

その作品-〈ソナタ〉と〈七重奏曲〉-は、次の形で『失われた時を求めて』全体に

- 1) 最初の演奏とヴェルデュラン家でのアンダンテ
- 2) ヴェルデュラン家におけるその他のピアノ演奏
- 3) オデットがピアノで弾く〈ソナタ〉
- 4) ヴェルデュラン家でのピアノ演奏による〈ソナタ〉
パリ郊外で聴いた小楽節
- 5) サン＝トゥーヴェルト家の夜会でピアノとヴァイオリンで演奏された〈ソナタ〉
- 6) オデットから語り手への〈ソナタ〉の継承
- 7) ヴァントゥイユとワーグナーの比較
- 8) 〈七重奏曲〉
- 9) 自動ピアノの演奏

4 無意識的記憶 (mémoire involontaire) の現象→幸福な恋愛の思い出がよみがえる。

「あのすべての思い出がよみがえり、それらの思い出は、恋の時期をかがやかせていたあの光がまた突然さしてきたのだと思いこみ、その光にだまされて目をさましながら、はばたきして舞あがり、現在の彼の不幸をあわれみもしないで、幸福の歌の忘れられたルフランを狂おしげに彼の耳にひびかせるのであった」(ちくま、582)

5 「その小楽節が、彼の恋の秘密をきいてくれる守護女神であって、聴衆を前にして彼のかたわらに近づき、彼を脇に連れて行って話しかけようと、そうした楽の音に身をやつして現前しているのだ、と感じるのであった。そしてその女神が、彼に必要な言葉を告げながら、香水の匂いのように、軽く、心をやわらげ、そっとささやいて通りすぎてゆくあいだに、彼はその一語一語を玩味し、その言葉がそんなにも早くとびさるのを惜しみながら、なだらかに、逃げて行くように過ぎ去る、その調和あるからだに、無意識のうちに、くちづける動作をするのであった。」(ちくま、586)

6 「スワンとおなじように、ひどく苦しんだにちがいがなかったあの未知の崇高な兄弟」(ちくま、587)